

# ウニス王のピラミッド・テキスト（２） —第 23 番～第 57 番—

吹田浩\*

Pyramid Texts of Unis (2): Utterances 23-57

Hiroshi SUITA\*

## [Abstract]

This is a translation of the Pyramid Texts of Unis from Utterance 23 to Utterance 57. In 2009, I started a plan to translate the Pyramid Texts of Unis from hieroglyphic texts into Japanese according to his original utterance order. The present paper is a second part in succession to the first one from Utterance 226 to Utterance 243. An aim in this translation project is to prepare a direct access, not through European translation, to the Pyramid Texts for Japanese specialists and any people who are interested in religions, ancient history and also Egyptology. Another aim is to contribute to the conservation works that the “Egyptian-Japanese Mission for the Mastaba Idout” conducted from 2003 by reconstructing some religious background of mastaba in the Old Kingdom. Idout’s mastaba dates to the same age as Unis constructed his pyramid in Saqqara. In this paper, I present a new coherent translation by referring to the works of Samuel A. B. Mercer (1952), Alexandre Piankoff (1968), Raymond O. Faulkner (1969), James P. Allen (2005), and Claude Carrier (2009).

## 1 はじめに

本稿は、古代エジプト時代の紀元前 24 世紀ごろの宗教文書、ピラミッド・テキストの翻訳を昨年度に引き続いて<sup>1</sup>行うものである。ピラミッド・テキストは、世界で最古のまとまった宗教文書であり、古王国時代の後半のピラミッドの内部の壁面に彫りこまれている。第 5 王朝のウニス王のピラミッドに初めて現れて、その後、第 6 王朝のテティ王、ペピ 1 世王、その妻アネクエスエンペピ、メレンレー王、ペピ 2 世王、その妻ネイト、イプート 2 世、ウジェベトニ、さらに第 8 王朝のイビ王の墓に残されている。

この文書は、最古のまとまった文書であるばかりではなく、王家の文書として丁寧に制作されており、死者の書など後世の資料と比較して格段によくテキストが管理されている。また、複数のピラミッドから並行する呪文を見ることができ、テキストの比較検討も行うことも可能である。

一方で、ピラミッド・テキストが古期エジプト語という古い段階の言語で書かれているうえに、宗教文書に特有の難解な表現が多くあり、翻訳することはけっして簡単ではない。また、ピラミッド・テキストは、後世の文書と比較して極めて簡潔な表現をしており、前後の文脈からの推測して翻訳することも難しい。いくつも行われている欧米での翻訳も、現状では、確実なものにはなっていない。

すでに先に紹介しているように、ピラミッドの・テキストの翻訳と研究では、ゼーテの影響が強く、近年、アレンが新しい観点からの訳を提示している。日本ではピラミッド・テキストは部分的にしか紹介されてい

---

\* 関西大学文学部 (Faculty of Letters, Kansai University, Japan.)

1 本稿に先立ち、ピラミッド・テキストの始まり部分を翻訳している。吹田浩、「ウニス王のピラミッド・テキスト（１）—第 226 番～第 243 番—」『関西大学文学論集』第 59 巻第 2 号（2009 年）。

ないため、本稿でアレンによるピラミッド・テキストの本来の順序にしたがって翻訳と紹介を試みるものである。

また、訳者は2003年より「日本・エジプト合同マスタバ・イドゥート調査ミッション」としてエジプトのサッカラで紀元前2360年に遡るイドゥートという名前の王女のマスタバ墓の地下にある埋葬室の壁画の修復にかかわっている。本稿は、この文化財の修復と活用に資する情報として同時期のウニス王のピラミッド・テキストから当時の宗教世界の復元を行う基礎研究でもある。

今回、翻訳を行うのは第23番～第57番である。これらの呪文は、埋葬室の北面と埋葬室に入る短い通路の北面の2か所に書かれている。ピラミッド・テキストでは、いくつかの呪文が何回か繰り返して使われることがある。本稿にかかわる範囲では、第32番の呪文は、2回現れている。本稿の目的が文化財の復元や活用を念頭に置いて、当時の慣習や世界観の復元を行うため、このような繰り返し部分も省略せずに訳すことにした。

第23番～第57番は、供物を捧げる儀式 (Offering Ritual) の一部を占める。その内容は、亡くなった王に水を捧げることではじまり、続いて香をささげ、ナトロン水で王の口を清めて、「口開きの儀式」へと進み、この儀式を受けて、食べ物と飲み物を亡き王に与える儀式へと進む。これらの呪文では、儀式に際して述べられた言葉が極めて簡潔に述べられているものが多い。

ピラミッド・テキストの翻訳では、ゼーテの影響力が大きいのが、彼が翻訳と解説を行っているのは第213番からである。ここで訳した第23番～第57番に関しては、フォークナー、マーサー、ピアンコフ、アレンの翻訳がまとまったものとなる。また、今回、クロード・キャリエが翻訳を行ったものを入手することができたため、これも利用した。

なお、呪文のなかにしばしば儀式の動作や供物の名前などの説明が加えられることがある。このような説明は、呪文の途中で現れることが多いが、本稿の訳では呪文の終わりにつけている。

## 2 テキスト (第23番～第57番)

### 第23番

オシリスよ。汝のためにウニスを嫌う者を誰でも、彼の名前で悪く話す者を捕らえよ。トトよ。行け。彼をオシリスのために捕まえよ。ウニスの名前に悪く話す者を連れて来い。彼を汝のために汝の手に置け。4回、唱えること。汝が彼から離れてはならない。気をつけよ。汝が彼から離れないように。水を注ぐこと。

この呪文によって、亡くなった王に供物を捧げる儀式が始まる。この呪文は、呪文の終わりにある説明から水を注ぐ儀式 (libation) と考えられる。内容は、敵を排除し、制圧するものであり、これによって儀式を始める前提を作るのであろう。「ウニスを嫌う者」は、形容詞 “*nbw*” がついているが、あとから「彼」を指す代名詞 “*šw*” があることから、英語で言う every の意味合いであろう。また、フォークナーはこの “*šw*” を “be harmful,” “dangerous” と、マーサーは “who has injured Osiris” (“*šw Wsir*”) と解釈しているが、少なくともこの個所ではこのような訳は不必要であり、「彼」でよいであろう。

### 第25番

行く者がそのカーとともにいった。ホルスがそのカーとともにいった。オシリスがそのカーとともにいった。セトがそのカーとともにいった。トトがそのカーとともにいった。神は、そのカーとともにいった。オシリスがそのカーとともにいった。ケンティ・イルティがそのカーとともにいった。汝もまたそのカーとともにいった。

おお、ウニスよ。汝のカーの腕は汝の前にある。おお、ウニスよ。汝のカーの腕は汝の後ろにある。おお、ウニスよ。汝のカーの足は汝の前にある。おお、ウニスよ。汝のカーの足は汝の後ろにある。

オシリス・ウニスよ。私は、汝にホルスの目を与えた。汝の顔がそれによって備えられるために。ホルスの目の香りが汝に広がるであろう。4回、唱えること。香と炎。

第24番は、ペピ2世のテキストから取られており、ウニス王のテキストには見られない。ウニスのピラミッドでは、この第25番が先の第23番に続いている。この呪文は、終りの説明の言葉からわかるように、香を捧げる呪文である。「カー」は、通常、「霊」と訳されることが多いが、正確には「生命力」を意味する。(拙稿、「古代エジプトのカーの形象考—古王国時代資料に見る」『藤本勝次、加藤一朗両先生古稀記念中近東文化史論叢』(1992年)を参照せよ。)ここでは、ホルス、オシリス、セト、トトをはじめとする神々が生命力とともにあることを述べて、亡くなった王もまたふたたび生命力にあふれることを祈願するものであろう。次に、生命にあふれる王が実際に手足が自由に動くようになったことが示されている。

ウニスのテキストは、この呪文では3つの平行するテキストをもっている。そのうちの一つでは、「4回、唱えること」の部分「ホルスの目の香りが汝に広がるであろう」の前についており、もう一つでは、「4回、唱えること」の部分「ホルスの目の香りが汝に広がるであろう」をsubjunctiveで訳している。「ホルスの目」という表現は、宗教文書にしばしばあらわれる。これは、親孝行、親への供物を意味し、ここでは香や炎を意味している。

この呪文で「神」と訳した語に関しては、その読み方は確実ではない。この神の単語は、通常、神の決定詞に使われる文字だけで表わされている。マーサー、ピアンコフ、アレンは「神」と訳している。ハニヒの辞書(Rainer Hannig, *Ägyptisches Wörterbuch I: Altes Reich und Erste Zwischenzeit*, Mainz am Rhein, 2003)においても、この文字だけで神と訳す例をあげている。フォークナーとキャリエは、「ドゥン・アヌイ神」(*Dwn-ꜥnwy*)としている。このドゥン・アヌイ神の可能性については、マーサーもその注釈で論じている。また、このように具体的な名前を入れずに「神」とする例は、古代エジプトのテキストではしばしば見られるものである。

ちなみに、「行く者がそのカーとともにいった」という表現については、マーサーは次のように述べている。「この表現法は、強調のものであり、そのカーと行った者は本当に行った、つまり、彼は行って帰ってこない(*he is gone to stay*)、である」。これと類似の表現は他にも見られ、何らかの特別な意味合いがあると思われるが、現時点では正確に理解することは難しい。

### 第32番

汝のこの冷たい水は、オシリスよ、汝のこの冷たい水は、おお、ウニスよ、汝の息子のもとに出てきた。ホルスのもとに出てきた。私はやって来た。私が汝にホルスの目をもたらすために。汝の心臓がそれによってすっきりとするために。私がそれを汝のサンダルの下に置くために。汝から出た液体を汝のために取れ。汝の心臓はそれによって弱ることはない。4回、唱えること。来い。声が汝のために出されてあれ。冷たい水と2粒のナトロン。

第26番から第31番の呪文は、ペピ2世のテキストである。ウニスのピラミッドでは、第32番が続くことになる。この呪文では、冷たい水を用いて、死者オシリスが復活することになって、亡くなった王を復活させようとするものである。その際、亡くなった王の後継者がホルスとしてその水を取り扱うことになっている。呪文の終わりの説明から、この呪文がナトロン水で口を清める儀式にかかわっていることがわかる。

実際の訳では法、時制、主文・従属文の関係、訳語のニュアンスなど細かな点で研究者の間に異同が多くある。「汝のこの冷たい水」(*ꜥbhꜥ.k ipn*)での“*ipn*”は、通常、形容詞として使用される指示代名詞であるが、マーサーは“*This is thy cool water*”、ピアンコフは“*This is thy libation*”と訳している。

「来い。声が汝のために出されてあれ」の箇所の解釈は、フォークナーが“*a well-known crux*”と述べるように難しい。ここの諸家の訳をならべてみると、ピラミッド・テキストの解釈の実態がよくわかる。マー

サーは“…, when thou goest forth justified”とし、ピアンコフは“Take! The voice has come out for thee”、フォークナーは“Take what comes forth at the voice to you”、アレンは“Come, you have been invoked”、キャリエは“Prends ce qui est sorti à la voix pour toi!”としている。アレンは、1984年の段階 (*The Inflection of the Verb in the Pyramid Texts*, § 552 and note 389.) では、“pri”を他動詞として、“Come! The voice is sent forth to you!”として“no-future tense”で訳しているが、2005年のピラミッド・テキストの訳ではこの訳を放棄しているように思われる。ハニヒ (*Ägyptisches Wörterbuch I*) は、“pri-hrw”の項で“möge dir das Totenopfer gebacht werden”としている。これは、subjunctiveであり、声をあげて行われる供物の儀式として解釈しているものである。文脈上、訳者はハニヒの訳が望ましいと考えている。

この呪文は、ウニスのテキストでも4つの平行するテキストがある。最後にある説明の項目「冷たい水と2粒のナトロン」は、他の箇所では、「冷たい水を与えること。周辺で取ること」「冷たい水と2粒」「冷たい水を与えること」となっている。

### 第34番

ゼミン (*smin*)、ゼミン。汝の口を開くもの。おお、ウニスよ。汝がその味を神の小屋の先頭で味わうように！ホルスが吐き出すものは、ゼミンである。セトが吐き出すものは、ゼミンである。2柱の神の心を調和させるのは、ゼミンである。4回、唱えること。汝のナトロンは、ホルスの従者たちのなかにある。上エジプトのナトロン、5粒、ネケブ (のもの)。

第33番の呪文は、ペピ2世のみのテキストになっている。この第34番の呪文は、その終わりにある説明にナトロンが出ており、また、本文中に口から吐き出すという行為があることから、ナトロン水で口を清める儀式と考えられている。呪文の始まりに出てくる「ゼミン」(*smin*)は、何であろうか。このあとに続く文から、ウニス王が味わうものと推測できる。この語はキャリエがナトロンと訳す以外は、ハニヒも辞書に訳は出していない。マーサーは注釈の中で、ナトロンの一の可能性を示唆している。ピアンコフは、もっと広く、感嘆の声、清めに関連した用語、ナトロンなどで考えている。呪文の内容から、ゼミンをこの儀式に特化したナトロンとすれば、口を清める儀式として納得がいくものとなる。一方で、アレンはこのゼミンを「練乳」と訳している。彼の注(16)によれば、ナトロンと練乳の色や粘度が類似していることからくる比喩としていると思われるが、積極的に「練乳」と考える根拠は不明である。「神の小屋」(*shw-ntr*)は、遺体をミイラにする場所であり、ナトロンが大量に使用されたであろう。「吐き出す」(*iss*)は、ピアンコフ、マーサー、フォークナー、キャリエは関係形、アレンは名詞「吐き出し」としている。いずれにせよ、口を清める行為であろう。最後の文「汝のナトロンは、ホルスの従者たちのなかにある」では、ピアンコフ、マーサー、フォークナーは“*hsmn*”を動詞「清める」で訳し、アレンとキャリエは名詞「ナトロン」で訳している。ハニヒ (*Ägyptisches Wörterbuch I*, “*hsmn*.”) は、この個所を動詞で“s. reinigen”としており、動詞としての解釈が多いが、現状では一方に決めるのは難しい。

### 第35番

汝のナトロンはホルスのナトロンである。汝のナトロンはセトのナトロンである。汝のナトロンはトトのナトロンである。汝のナトロンは神のナトロンである。汝のナトロンも、彼らの中にある。汝の口は、生まれた日に乳を吸う子牛の口である。下エジプトのナトロン、5粒、ワディ・ナトロン (のもの)。

この呪文も、ナトロン (*ntry*) にかかわっており、ナトロンで口を清める儀式が続いているものと思われる。フォークナーはナトロンの使用目的からこの語を「清め」(purification)と訳しており、一方、ピアンコフ、マーサーは動詞として「汝が(自らを)清める。ホルスが(自らを)清める。……」と訳している。ここで考えられているのは、「汝」(亡くなった王)をホルス、セト、トトと対にして組み合わせて、

彼らの清さとならべて、王の清さを保証することであろう。「汝のナトロンも、彼らの中にある」の箇所では、フォークナーとアレンは“*im(y)t(w)*”を前置詞にとって「彼らの中にある」としており、この解釈は亡くなった王を神々に並べる文脈にも対応している。ピアンコフのように「汝はまた彼らの中にあるもので自らを清める」と解釈する積極的な理由はないと思われる。マーサーの訳は、注釈に彼の解釈が述べられているとはいえ、難しい。キャリエは、ここでナトロンを“*bd*”とよみ、このあとに続く“*r*”をナトロン“*ntry*”のふり仮名ではなく、前置詞と取り、さらに対比される2つの文を接続詞でつないでいる。“*Le natron est [pour] toi comme le natron est por Horus!*”この訳は文法上不可能ではないが、通常、“*r*”は“*against*”の意味を持つので、無理があるように感じる。「神」については、先の第25番と同じく、「ドゥン・アヌイ」の可能性もある。「生まれた日に乳を吸う子牛の口」は、フォークナーによれば、純粋で穢れのない状態を表しており、王の口が清められた状態を指している。

### 第36番

汝のナトロンはホルスのナトロンである。汝のナトロンはセトのナトロンである。汝のナトロンはトトのナトロンである。汝のナトロンは神のナトロンである。汝のナトロンは汝のカーのナトロンである。汝のナトロンは汝のナトロンのナトロンである。汝のこのナトロンは、また汝の兄弟たち、神々の中にある。

汝のナトロンは、汝の口の上にある。汝が汝の骨全体を清めるように！汝が汝にあるべきものを備えるように！

オシリスよ。私は、汝にホルスの目を与えた。汝の顔をそれによって良い香りをさせながら備えよ。香、1粒。

この第36番の呪文も、先の第35番に引き続いてナトロンとそれによる清めに関係した呪文である。「骨全体」という表現があるので、清められるのは口だけではなく、体全体かもしれない。呪文の終わりの説明で「香」が捧げられるものとしてあげられていることから、口を清める段階から次の段階に移行しつつあるように思われる。

前の呪文と同じく、ナトロンは「清め」とも「清める」とも解釈が可能である。「神」についても、フォークナーとキャリエが「ドゥン・アヌイ」と訳すのは同じである。“*htm*”という語が2回出てくるが、ピアンコフ、フォークナー、キャリエはどちらも“*provide*”などで訳し、アレンは初めは“*end*”として「汝に対して（悪く）あるものを終わらせるだろう」と訳し、2回目は“*provide*”としている。この語に決定詞もなく、文脈上も、ここで確定することはできない。

### 第37番

おお、ウニスよ。私は、汝の外れた顎を固定した。ペセシュ・ケフ道具。

この呪文から、「口開きの儀式」が始まる。「ペセシュ・ケフ道具」とは、「口開きの儀式」で使われる道具である。ピアンコフ、フォークナー、アレンは第1人称のOld Indicativeで訳しているが、マーサーとキャリエは命令法にしている。「口開きの儀式」が、息子であり、後継者であるホルス、つまり、新たに即位した若い王によって取り行われるはずであり、文脈からは、第1人称での訳が望ましいと思われる。

### 第38番

オシリス・ウニスよ。私は、汝のために汝の口を開いた。上エジプトの神の鉤物、下エジプトの神の鉤物。

この第38番の呪文では、「口開きの儀式」がまだ続いている。先の呪文と同じく、この呪文は亡くなった王の息子、ホルスが亡き父に向かって述べているものである。「神の鉤物」は、ハニヒ (*Ägyptisches Wörterbuch I, "bi3."*) は、“*bi3 ntry*”としている。

### 第 39 番

ウニスよ。汝のためにホルスの目、彼が向かうものを取れ。私は、それを汝に持ってきた。私は、それを汝のために汝の口に置いた。上エジプトのゼルと下エジプトのゼル。

「口開きの儀式」が続いている。「彼が向かうもの」(*zif r.s*)での「彼」は、ホルスであろう。息子であるホルスは、儀式に必要なホルスの目を取るに行くのであろう。この個所を、アレンは“which went away”と訳している。彼は、1984年の段階(*The Inflection of the Verb in the Pyramid Texts*, § 642B)では、ここと同様の解釈をしていたが、どのような理由で解釈を変えたかは分からない。このような訳は、文法上、受け入れるのはあまりにも難しい。なお、「行く」の転字は、研究者のあいだで分かれている。たとえば、アレンは“*si*”(*The Inflection of the Verb in the Pyramid Texts*, § 729)、ハニヒは“*sb*”(*Ägyptisches Wörterbuch I*)としている。ゼル(*srw*)は、香の粒(マーサー、ピアンコフ、Hannig [*Ägyptisches Wörterbuch I*])か、塩の粒(アレン)である。

### 第 40 番

おお、ウニスよ。汝のためにオシリスのシクを取れ。シクの粒。

「口開きの儀式」が続いている。シク(*sik*)は、どのようなものかよくわからない。アレンはミネラルとし、ハニヒ(*Ägyptisches Wörterbuch I*)は、オシリス神の一部としている。

### 第 41 番

ホルス自身の胸の先端を取れ。汝のために汝の口へと取れ。ミルク。

ここでは、ミルクが亡き王に捧げられており、彼がミルクを口にするための呪文である。男神ホルスの胸から乳を得るのは違和感があるが、ここでは比喩として述べられているのであろう。胸は、“*mnd*”と綴られている。アレンは、文頭にある“*m*”を「取れ」という命令ではなく、“Here is”と訳している。非前接的不変化詞と解釈しているように思われる。以下の第 42 番と第 43 番でも同様である。

### 第 42 番

汝の妹、イシス、乳を与える者の胸を取れ。汝が汝の口に取るものを。空のメンザ壺。

ここでイシスにつけた「乳を与える者」(*bsjt*)の訳は不確かである。マーサーは、疑問符をつけながら「守られるもの」としている。フォークナーは「守る者」という訳を排除しないとしながらも、「乳を与える者」を選んでいいる。アレンも「乳を与える者」としており、必ずしも積極的な根拠はないが、ここではこの訳語をつけておく。ちなみに、ハニヒの辞書(*Ägyptisches Wörterbuch I*)は、両方の訳語を併記している。ちなみに、マーサーが守られると考えているのは、イシスではなく、ミルク(*irt*)の方であり、この場合、飛躍しすぎではないかと思われる。ピアンコフは、この語をおそらく胸につけて“the full(?) breast”と訳しているように見えるが、どのような文法上の解釈をしているか不明である。この考えは、キャリエが“*jaillissante*”とするのと関連があるかもしれない。ハニヒの辞書によればメンザ壺はビールを入れるものであるが、儀式では水やミルクが入られる。

### 第 32 番

汝のこの冷たい水は、オシリスよ、汝のこの冷たい水は、おお、ウニスよ、汝の息子のもとに出てきた。ホルスのもとに出てきた。私はやって来た。私が汝にホルスの目をもたらすために。汝の心臓がそれによっ

ですっきりとするために。私がそれを汝のサンダルの下に置くために。汝から出た液体を汝のために取れ。汝の心臓はそれによって弱ることはない。4回、唱えること。来い。声が汝のために出されてあれ。冷たい水を与えること。周辺で取ること。

ユニスのピラミッドでは、ここで第32番の呪文が再度現れる。この第32番は4つのテキストがあり、2つ目のものがここに入る。呪文の最後にある説明がこの個所で「冷たい水を与えること。周辺で取ること」になっているが、テキストの内容は同じである。この個所は、アレンにしたがい、“*dit kbhw šdit h3*”と読む。フォークナーは、“*dit kbhw Mht*”と読んで「下エジプトの冷たい水を与えること」としており、ピアンコフは、“*dit kbhw Mht h3*”と読んで“To make a libation of the North, round about”としている。この呪文を、唐突に下エジプトに関連させる理由は特になくとも考える。

#### 第43番

ホルスの2つの目を取れ。黒いものと白いものを。それらを汝のために汝の額へと奪え。それらが汝の顔を照らすために。白い壺と黒い壺。持ち上げること。

第43番の呪文は、亡き王に2種の壺を捧げる呪文である。黒と白の組合せから、何らかの神話上の背景があるように思われる。マーサーは、太陽と月、右と左、西と東という対比に触れている。

#### 第44番

天のラーは、汝に満足している。彼は、汝のために2人の主を満足させる。夜は、汝に満足している。二女神は、汝に満足している。満足が、汝にもたらされたものである。満足が、汝が見るものである。満足が、汝が聞くものである。満足は、汝の前にある。満足は、汝の背後にある。満足が、汝のもとにあるものである。新鮮なパン。

呪文の終わりの説明から、王にパンを捧げる呪文であろう。フォークナーは、この呪文で太陽(ラー神)と夜、2人の主と二女神が対比されており、両者が合わせて王に寵愛を与えていると考えている。「汝にもたらされたもの」は、マーサーやフォークナーと同じく、“*int nt.k*”を“*in(i)t n.k*”とした。アレンは、「2人の主」(“*nbwy*”)の箇所も「二女神」(“*nbtj*”)として訳している。確かにここで「2人の主」に当たる部分は「二女神」の表記が崩れたようにも見えるが、フォークナーが考えるように対比の意味があると思われるため、ここでは、「2人の主」と訳す。マーサーは、「満足」(“*hpt*”)を「供物」と訳しているが、決定詞に巻物が付いているため、「満足」と訳す。

#### 第45番

オシリス・ユニスよ。汝のためにホルスの白い歯、汝の口に与えるものを取れ。玉葱、5束。

これは、玉葱を捧げる呪文である。玉葱は、古代エジプトでは主要な供物のひとつである。ここでは、「白い」(“*hḳ*”)と「玉葱」(“*hḳw*”)は、音をそろえられている。この呪文は、文脈から、王が玉葱を食べることができるように王に歯を与えるためのものである。「汝の口に与えるもの」という表現は、歯が口に玉葱を与えるという意味である。なお、マーサーは供物の名前を、玉葱ではなく、白いケーキとしている。

#### 第46番

4回、言葉を唱えること。王がユニスのカーに与える供物。オシリス・ユニスよ。汝のためにホルスの目を取れ。汝のパト・ケーキ。汝が食べんことを！供物のパト・ケーキ。

「王が与える供物」(*htp-di-nšw*)という表現は、古代エジプト時代に好んで使用される定型句である。古代エジプトでは、理念上、供物を与えるのは王である。この呪文は、亡くなったウニス王が死後もパンに困らないようにするものである。「ホルスの目」は息子が父親に捧げる供物のことである。「カー」は、一般に「霊」訳されることが多いが、「生命力」を意味する。この呪文での「ウニスのカー」は、「生命力に満ちたウニス」を意味する。(拙稿、「古代エジプトのカーの形象考—古王国時代資料に見る」『誌藤本勝次, 加藤一朗両先生古稀記念中近東文化史論叢』(1992年)を参照せよ。)

#### 第 47 番

オシリス・ウニスよ。ホルスの目を取れ。セトから自由になったもの、汝が汝の口へと取ったもの、汝がそれで汝の口を開けたものを。ワイン、白いメヌ石、ハチェス壺。

「ホルスの目」は、かつてセト神に奪われて、のちにホルス神に取り返された。この出来事は、ホルスが父オシリスの死をめぐって起きたことから、「ホルスの目」は親孝行の象徴となった。さらに、親孝行の最たるものとして「ホルスの目」は供物を意味するようになった。この呪文での「セトから自由になった」という表現は、セトから取り返されたホルスの目に関連している。ここでは、ワインを意味している。

#### 第 48 番

オシリス・ウニスよ。汝の口を、汝に満ちるべきもので開けよ。ワイン、黒いメヌ石、ハチェス壺。

この第 48 番の呪文は、ワインの容器の白と黒の色を対比して、第 47 番と対になっている。王の口は開けられているのか、開けよと命じられているのかは、決めるのは難しい。受動態で訳しているのはフォークナーであり、命令で訳しているのはピアンコフ、マーサー、アレン、キャリエである。一般に、呼びかけのあとは命令で訳す方がすっきりすることが多い上に、この呪文と対になっている第 47 番が明らかに命令であることから、ここでも命令として訳した。なお、ピアンコフは、“*mḥt im.k*”を“what took hold of thee”としている。他の研究者は、この語を“*mḥi*”「満たす」に関連して訳している。この呪文が、前の呪文と同じく、亡くなった王に自由にワインを飲ませるのが目的であることからピアンコフの解釈は不要であろう。

#### 第 49 番

オシリス・ウニスよ。汝のために発酵物、汝から出てきたものを取れ。ビール、黒いメヌ石、ヘント壺。

ここでの「発酵物」(*ḥnk*)は、明らかにビール(*ḥnkt*)の発酵物である。マーサーとピアンコフは、「液体」(liquid)としている。第 55 番の呪文と類似しており、発酵物が出てくるのは王というよりも復活の神オシリスのことであると思われる。オシリスは植物として死んだのちに復活するモチーフを持っており、麦として復活する場面が亡くなった王にビールをもたらす目的で関連づけられているのであろう。亡くなった王にビールを確保するための呪文であることは明らかである。

#### 第 50 番

ラーよ。汝の夜明けは、天にいる者よ、汝の夜明けは、ウニス、万物の主のためにある。汝自身に万物が属する。ウニスのカーに万物が属する。彼自身に万物が属する。聖なる供物台。

はじめの文では、呼びかけが 2 回、主語も 2 回あるとして訳した。このような単純な形を取らない構文では、訳者によってかなり訳が異なることになる。この呪文は、太陽(ラー)が万物を支配するように、亡くなった王も万物を支配することを述べている。万物は、具体的には供物を意味していると思われる。この第



50 番の呪文は、ペピ 2 世のテキストにもあるが、そこでは「聖なる供物」の前に「彼の前で持ち上げること」という言葉が付いている。アレンがここで「供物台を掃くこと」と訳したのは「聖なる」(*dsr*)の文字を「掃く」として訳したためかもしれない。

#### 第 51 番

ウニスよ。汝自身のためにホルス目、汝が味わうものを取れ。デペト・ケーキ。

アレンは、「デペト・ケーキ」(*dpt*)を“loin' cake”と訳している。たしかに“*dpt*”には「腰肉」という意味があるが、これをケーキの名前とした根拠は不明である。

#### 第 52 番

大地に下に置かれた者よ。闇の者よ。アフ・ケーキ。

フォークナーは、「大地に下に置かれた者」(*3h3hi*)と「闇の者」は、地下埋葬室の王を指すと述べている。「アフ・ケーキ」(*3h*)とは、音を合わせており、亡くなった王にパンを確保する呪文であろう。マーサーは“Darkness increases (?)”、ピアンコフは“Darkness clears up (?)”としている。いずれも疑問符をつけており、“*3h*”に洪水の際の波、“*3hr*”に耕地、すなわち洪水のあとに現れる土地という意味があることからの類推かもしれない。

#### 第 53 番

ウニスよ。汝のためにホルスの目、汝が求めたものを取れ。セケン肉。

「求める」(*shn*)は、「抱きしめる」(フォークナー、マーサー、アレン、キャリエ)や「見つける」(ピアンコフ)と訳すことも可能である。

#### 第 54 番

ウニスよ。汝のためにホルスの目を取れ。セトから自由になったものを。汝のために取られたものを。汝の口がそれによって開かれんことを。ワイン、白いメヌ石、ヘント壺。

アレンやキャリエのように、「汝の口を開け」と命令法で訳すことも可能である。また、マーサーや「汝がそれで口を開くもの」と関係形で訳すことも可能である。フォークナーは、直接法現在時制「汝の口はそれによって開かれる」で訳している。

#### 第 55 番

ウニスよ。汝のために発酵物、オシリスから出てきたものを取れ。ビール、黒いメヌ石、ヘント壺。

この呪文は、第 49 番の呪文の異型と思われる。

#### 第 56 番

ウニスよ。ホルスの目、汝のために取られたものを取れ。それは、汝から離れることはない。ビール、金属製、ヘント壺。

#### 第 57 番

ウニスよ。ホルスの目を取れ。それを汝につけよ。ビール、ヘテム製、ヘント壺。

ヘテム (“*htm*”) は、ハニヒ (*Großes Handwörterbuch Ägyptisch-Deutsch*) によれば、二酸化マンガン、カラムン、炉の屑物など、銅の精錬の際にできる酸化亜鉛の一種としている。訳語で「黒い」(blackened) としているのは、アレンである。

#### 参考文献

Samuel A. B. Mercer, *The Pyramid Texts in Translation and Commentary*, 4 Vols, New York, 1952.

Alexandre Piankoff, *The Pyramid of Unas*, Bollingen Series 40: Egyptian Religious Texts and Representations 5; Princeton, 1968.

Raymond O. Faulkner, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts*, 2 Vols, Oxford, 1969.

James P. Allen, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts*, Writings from the Ancient World 23; Leiden, 2005.

Claude Carrier, *Textes des pyramides de l'Égypte ancienne, Tome 1: Textes des pyramides d'Ounas de Téli*, Paris, 2009.

本研究は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成20年度～平成24年度）」によって行われた。